

「昭和期村落社会における生活とその変化

—革新的営農（洋菊栽培）採用をめぐる八ヶ岳南麓村の事例—

早稲田大学大学院 人間科学研究科 大澤 幸一郎

本報告は、昭和期を通じて村人が主体的、創意的、組織的に革新的営農（新規商品作物の生産）を自家経営に採用し、普及を図りつつ、内外の社会的条件の変化に独自の対応をしてきた、八ヶ岳南麓の高冷地山村（長野県諏訪郡富士見町瀬沢新田区）を対象とした事例研究である。

高冷地農業における水稻作の不安定な段階にあって、村の大半の家では家計を補うべく、商品作物の生産と農間余業を組み合わせた家業経営を行ってきた。当村における伝統的な家業経営の形態は「稲作＋商品作物生産＋自家用野菜生産＋農間余業（冬季の出稼ぎ；主として経営中・下層）」である。

同時に、村ではさまざまな新規商品作物の導入を試みてきた。そうした先導的役割の多くは、村内の上層農家によって担われた。彼らは自家経営の発展にとどまらず、中・下層農への普及をも視野に入れていたのである。そこでは、上層農がリスクを冒しても革新的な行為をなすことが、潜在的に期待されていたといえる。そして村人たちは、主体性をもってこれら新規営農を容許してきた。

本報告でとりあげる、昭和期（12年～60年）に展開した「洋菊栽培」の普及過程（洋菊栽培は現在当村における基幹産業の一つ）においても、その構造は共通している。そこで以下では、3つの視点を中心に考察を進めたい。その第1点は、洋菊栽培の普及過程において顕在化した村の社会構造の把握である。つぎに第2点として、家経営の視角から、新規営農がどのような生活の条件のもとで要請され、また、採用により生活構造がどのように改編されたかについて探る（資料として上層農家K家の「農家経営簿」を用いる）。そして以上の分析をふまえた上で、第3点として、社会的条件の変化に対する村の独自の対応を推し進めた原動力（論理）が何であったかを探る。そしてそれが、村においていかに醸され、村人の行為の地盤をなしてきたのか、また、昭和期の変動過程を経た現代において村をどのように性格づけているのかについても探る。

【対象村落および事例の概況】

本報告の対象とする村落は、八ヶ岳南麓の標高1000m付近に展開する、近世期の新田開拓村である。開拓の進展により近隣他村と比して相対的に耕地が拡大し、「百姓の大きい村」と称されるようになった。

当村においては戦前まで、所有土地により、上層手作地主（約8%）、中層自作農（約40%）、下層自小作層（約52%）からなる、比較的安定したゆるやかな階層構造が見られた。上層農家は経済的地位の他にも、「草分け」や「本家」であるという社会的地位の評価基準により家格が評価された（村人はこうした家を「大きい家」と呼ぶ）。上層の「大きい家」々は、村内における一定の地位役割があった。例えば、村落自治運営においては村役を務めるなど、村政の実質的意思決定権があった。また、村内の最下層農家を自家の農業経営に積極的に雇用することで（これを上層農家は「みてやる」と称していた）、相互の家の経営維持が図られていた。

村では明治期より養蚕業が農家経営の一翼を担ってきたが、一部の上層農ではより安定した農業経営を目的として、大正後期に加工用大根、昭和初期には高原野菜（主にキャベツ）の生産を図った。それらは村内にある程度普及して一定の成功をおさめた。また、農村恐慌期の繭価暴落が農家経営を逼迫させていた昭和12年には、上層の篤農青年らにより収益性の高い洋菊栽培が企図された。しかし、それは彼らの間に一定の成果をもたらしたものの、彼らが志向した村内への普及は、当初あまり進展しなかった。その理由としては、当時の農村恐慌の深刻化、さらに戦時体制への突入という時代背景のもとで、洋菊という商品生産に対する不安と、食糧増産という国策への即応が強化されつつあったことがまずあげられる。洋菊栽培の村内への普及が本格化するのは昭和25年以後になってからである。

現在でも村人たちは、これら他村に先駆けて新規営農を採用してきた村の歴史について、誇りをもって語る。その際にしばしば口にされるのが「この村の衆は『進取の気心』に富んでいる」という言説である。